

<地球を歩く>

イギリス留学記

——社会への介入の作法としての開発学——

片野 直子

2016年9月からイギリス、サセックス大学開発学研究所(Institute of Development Studies, IDS)の修士課程を履修しており、12月現在ちょうど秋学期を終えたところだ。まだわずか3か月の滞在ではあるがこちらの様子をお伝えしたい。

IDSは1966年設立、欧州随一の開発学研究・教育機関である。開発学は格差是正や持続性の向上をテーマとした学問であるが、一番の特徴は、ある地域の改良を目指し何らかの介入を行うこと、つまり実践を前提としていることだろう。国連をはじめとした国際機関と強い繋がりを持ち、途上国の地域開発に理論・実践の両面から強い影響を及ぼしてきた。世界中から学生・教員が集まっておりクラスメートを集めたら世界地図の縮図ができる。

IDSの教育では多様性を念頭においた批判的思考の涵養が非常に重視されている。そもそも開発学の背景にある植民地支配の歴史のために、国家間のパターンリズム、ジェンダー、アカデミズム、人種、社会的地位などから生まれる明示的・暗示的な力関係を詳らかにすることに重きが置かれていると感じる。

今学期の授業の中でEmpowering Societyというモジュールがあった。これは社会を変える動きがどのように起きるか、また既存の社会に埋め込まれた力関係をいかに読み解くかを主題としている。授業は午前中のレクチャーと午後のディスカッションに分かれ、毎回2～3本の論文が必須リーディングとなり、これを読んでから授業に参加することが前提だ。

ここまでは他の授業と同様だが、これに加えて社会運動を観察するというフィールドワークがあった。私は国籍・母国語が異なる5人でホームレスを支援する団体を研究することになった。バックグラウンドの全く異なるメンバーでのワークに四苦八苦しながらも、インターネットで目ぼしいNGOを探して無難に進めていたところ、担当のフェローから「まずは街に出てホームレスの人たちと話さなきゃ始まらないよ」とのアドバイスが。早々にNGOへのインタビューを済ませ、執筆の分担を決めて手際

よく形にしたいと考えていた私は頭が割れそうだった。詳細は紙面の都合で省くが、そこからレポート提出までは困難を極めた。日本で同じことを留学生のチームがやることになったらどうか、想像してほしい。

しかしこの時間消費的なグループワークを通して、一人では考えの及ばないような発想や行動ができ、自分が思考停止に陥っている偏見やパワー関係を目の当たりにする機会となった。それにはワークのプロセスが大きく貢献している。言葉や文化の相違からストレートに意見交換をしないと伝わらないので議論がダイレクトになる一方、英語力の差があるメンバー同士が活発に意見を出し、我慢強く話を聞き合うことができたのだ。つい忘れがちになるが効率性と合理性は全く違うものだ。

IDSでの教育は共存への理解を深め、多様な土地・文化においてプロジェクトを行う際に、他者を認めながらより良い道を目指す社会への介入の作法といえるのではないかと感じている。開発学の泰斗であるロバート・チェンバース教授が、地域開発の現場の心得的なワークショップの中で、「たぶん君は正しくて、僕は間違っているだろう、けれど両方を合わせることで真実に近づくことができる」という一節を紹介してくれた。さらに教授は、私たちはどれくらい自分のことが分かっていて、自分の力を行使することがどんな意味を持つか理解しているだろうか、相手の話を聞く前に、何パーセントくらい結論を出しているだろうか、と問いかけた。相互の尊重、共有、オープンネス、平等…色々なキーワードが学生の中から飛び出した。

IDSで語られる批判的思考、個人的にはずいぶん理解に苦しんだが、これは特定の立場を非難したり反対したりするということではなく、ある事柄に対し正しく距離をとって観察して分析することだ。実践の場ではしばしば一つの答えが出せない事があるが、それでも限られた時間の中でより良い結論を導くことが命題となる。他者と私が違うという事実を引き受けたうえで、相対主義に陥らずに最善の方法を編み出すためには、自分と他者両方への批判的思考が必要となるだろう(もちろん時には非難としての批判を含むときもある)。

批判的とは日本においてはどのように解釈されてきたのだろうか。批評家の小林秀雄は「生活的教養」としての「批評」について、『ある対象を批判する

とはそれを正しく評価することであり、その在るがままの性質を積極的に肯定すること』であり、そのために分析をするのだと記している¹⁾。私たちの研究で受け継がれてきたものはどのような態度であろうか、それは批判的思考と呼べるだろうか。またどのように実践されているだろうか。1年間という短い留学生活ではあるが、英国での学びを通して改めて見つめなおしてみたい。

【注】

- 1) 小林秀雄 (2004)『考えるヒント (新装版)』文藝春秋、p.201

(サセックス大学開発学研究所 修士課程)